

〔第27回学術集会 シンポジウムII〕

家族に恵まれない子どもたちを支える中で学んだこと

中日青葉学園わかば館

前館長 近藤日出夫

自身の生き立ちを含め人生の大半を共に過ごしてきた社会的養護に暮らす子どもたちの姿を通して、そこに関わる家族のありのままの姿（生の過程）と向き合い援助を展開してきた中から学んだ事柄の一端を紹介させていただくことが、多様な家族の在り方や理解の一助に繋がるのではとの思いから原稿と向き合いました。

子ども時代に家族から十分な「無償の愛」を経験することなく育ってしまった子どもの中には、ストレスの耐性であるストレスコーピングが弱いが故に、自分や他者の感情を正しく読み取ったりする力が弱いため、対人トラブルの頻度が高いと思われます。それは保護者にも通ずることで、親子関係が円滑に進められず、人間関係の構築が難しくなること

で、結果的に虐待などへ繋がっていく恐れがあります。

また、同様に、職場での人間関係においても、対応のまずさからトラブルになり、退職に追い込まれた保護者を見てきました。

世間の目は、社会のセーフティネットから滑り落ちた人に対しては厳しいものがあり、自己責任だから仕方がないと切り捨てられている人が増えているように感じています。

家族はかけがえのない宝物として位置づけ、家族に恵まれない子どもたちをフォスターフレンドの考えに立って、温かく見守ることのできる社会の実現に向けて、微力ながら人材育成の立場から、これからも応援していきたいと考えております。

まちがあそび場！まちがりビング！まちが家族！

NPO法人コドモ・ワカモノまちing

代表 星野 諭

子どもたちが道で遊び、近所の人が見守る。そんな当たり前の光景が、ここ数十年の間に失われてきました。また、近年は日本の子ども・若者の孤独感が強くなり、自殺が事故の2.5倍にも増え（世界各国は事故の方が多い）、2020年9月のユニセフ＝国連児童基金の調査（先進国・新興国38か国）でも、精神的な幸福度は37位となっています。

そこで、私たちは、子どもの居場所づくりとつながりを再生するため「移動式子ども基地」という活動を2008年より開始しました。様々なモノを載せたプレイカーで、都市部や被災地、里山に遊びを出前しています。現代版の紙芝居屋のように、放課後や休日などに道や広場に現れ、世代を超えた遊びや

学び、交流のきっかけをつくっています。他にも、みんな食堂やオルタナティブスクールも開催し、「子縁コミュニティ」を育てています。さらに、今は、コロナ禍により遊びが制限される中、「10分みたら100分遊びたくなる」ようにyoutubeやZOOMなどで、創造あそびや子育て講座などを実施しています。

遊びは生きること！子どもから豊かな遊び環境は奪ってはいけません！今こそ、子どもの5間＝時間・空間・仲間・すき間・手間を再構築する必要があり、そのためには人・場・モノ・コト・心のコミュニティのシェアが不可欠なのです。